

令和5年度第1回愛知県環境教育等推進協議会会議録

1 日時

令和5年7月10日（月）午前9時30分から午前11時まで

2 場所

愛知県庁本庁舎 6階 正庁

3 出席者

委員16名（うちオンライン出席1名）

4 傍聴人

なし

5 会議の概要

(1) 開会

(2) あいさつ

川村委員

(3) 会長等の選任について

千頭委員が会長に選出され、大鹿委員が会長代理に指名された。

(4) 議事

ア 中間評価の構成案について

事務局から資料1について説明。

イ 各主体の取組事例の調査について

事務局から資料2について説明。

ウ 各主体の環境学習等に関する取組状況について

関係委員から資料3について説明。

エ その他

特になし。

【質疑応答・要旨】

ア 中間評価の構成案について

(新海委員)

何のために中間評価をするかということが重要になる。中間評価をして、出された成果と課題をもとに、どのように愛知県の施策により課題に対して後押ししていくかのデザインをしなければ評価が目的になってしまう。ステップアップ・ワークシート（以下「ワークシート」）を作成していくことは重要だとは思いますが、その後に抽出された課題に対して各主体が解決のためにどのような後押しをしていくかという視点を踏まえた上での評価であるといい。

次につながるためにどのように協働しているかという視点が、必要になってくる。単に報告、評価、課題抽出を実施するだけでは、その後の展開が見いだせないのではないかと危惧している。

(大鹿会長代理)

定量的な変化はアンケートで全体的な傾向が出てくると思うが、定性的な調査はこの8事例で把握できると思う。本当はできていない事例を取り上げることが大事になるが、それを選定しても全部やれていないという0か100かの話になってしまう。良い事例を選定したから評価は良いという話にはならないので、ここができていないところ gauまく出てくるといい。

できていないところはまず一歩進むというのを目指す。できているところの中でも、どこが足りないかこの中間評価で見えるようにできるといい。それをどう今回のものから見定めていくのかは難しいとは思いますが、取組状況に合わせて段階的に力を入れるとよいところを指針として示せるとよいと思う。

(近藤委員)

幸田町の場合は、環境基本計画の中で環境学習を位置付け、町の教育委員会と協力して地元の小学校4年生に環境出前講座を実施したり、県の森と緑づくり事業の補助を受けて環境省環境アドバイザーの先生を招いて環境学習の取組をしている。

県との関係性というところでは、補助事業や県の環境基本計画などを参考にして取組を進めているが、細部というか具体的なところにおいても市町村に対する説明の機会があるといいと感じている。

(伊藤委員)

中間評価の評価軸の流れは変えないで、時代に合った形にしていこうとなると、評価は定量的なことで淡々としていくしかないと思う。

愛知県環境学習等行動計画2030（以下「行動計画」）の目的は、行動する人づくりな

ので、駄目な点を示す評価より、裾野を広げるためにグッドプラクティスを普及、共有していく方がよい。

学校は比較的閉じた空間であり、社会とのつながりを持つ余裕がない。特に私立の場合は、働き方改革の縛りも出てくるため、コンテンツや機会の提供など、できるだけ本務を支援するような体制のものであると、教職員が比較的関わりを持ちやすいものになると思う。

(川手委員)

県で進めている行動する人づくり、そこで求められている五つの力というのは現在の学校教育の方向性と合致していると思う。

教育のベースになる今の学習指導要領を作る際にも、今どきの子供たちは自然体験が少ないという意見があったが、私もそれは実感している。

知識として理解することは学校現場で進められるが、どこに体験の場を求めるかということが問題となる。私たちが子供の頃に経験してきたような自然体験がない子供たちが、いかに周囲の環境に思いを馳せていくのか、その中で自分が生きることの大切さを培っていくのが、この行動する人づくりという一つの言葉として示されており、求められている五つの力と合っていると思うので、体験する場を提供していただきたい。

(藤岡委員)

我々EPOCでも環境教育講座を各企業で企画しており、小中学校、児童館等からの要望に沿って出前講座などを毎年開催している。中には形骸化というか、少し質がおざなりにされているような部分があるかもしれないと感じている。

その部分を改善していくというか、五つの力を育てていくと考えていったときに、このワークシートを、一旦評価をして足りないところが見いだせて、次の改良につなげていくというツールに仕上げられると、我々のクラブの中でも、講座の内容を充実させることに活用できると思う。その視点も入れて今後のこのツールを改良することを検討してもらいたい。

(千頭会長)

中間評価をしてそれを今後の県の環境行政にどう活かすのか、何か事務局としての考えはあるか。

(事務局)

中間評価の結果を環境行政にどう反映させていくのかは、これから議論する中で検討していかなければならないと考えている。まずは2030年度に向けてこのワークシートをグッドプラクティスとして横展開していくためにも、より多くの人に使っていただく

ことが課題と考える。

(新海委員)

近年様々な法律や目標が出され、必要とされる教育内容が変わってきている。

県やNPOも、時代や社会ニーズに合った次の世代に必要な知識、情報、体験を展開していく必要がある。県には次の展開を見据えて、パートナーシップの構築や企業の技術革新の教材化などの情報提供を行ってほしい。

幼児期の自然体験は基礎になる。その次に、子供たちや学生がどのような活動をしたらよいかを考える素材を提供してほしい。

このワークシートを広く活用するためにも、従来の手法にプラスアルファして今後求められることを書き足していく必要がある。2030年には使えなくなってしまうのではないかと危惧している。

このワークシートは対象先の団体にもフィードバックをし、広く見せていくことになる。いい点を示していくものになると思うが、もう一歩ここをやってみてはどうかという視点も入れた方がよいと思う。

イ 各主体の取組事例の調査について

(栗木委員 (代理))

ワークシートのねらいの部分で、学習者の取り組み後のビジョンを具体的に意識することが大事なので、そこは明確にしておく必要がある。協働の視点で、学習者に対し、主体ごとに何ができるかを記入できる部分があるといい。

(篠田委員)

このワークシートはこのプログラムを実施したらここに到達するということが実施前から分かる。それはそれでいい。

最近実施した環境教育プログラムの中で、学校や幼稚園で好評なものは、グループに分かれて非接触型体温計で10ヶ所温度を測るものである。結果を子供たち同士で見せ合って、一番温度が高かったところ、低かったところをみると、一番高いのはアスファルト、低いのは森の中や池の水と答えが必ずそろってくる。そこから、今温暖化で森が少なくなっているから地球も暖かくなっているという答えが、子供たちから自然に出てくる。プログラムとしては、本当はそれが一番いい。

それができる人がなかなかいないという人材不足の現状を踏まえた評価をしていければよいと思う。

非常にいいプログラムでよく使われて、同じ答えが必ずでるのはいいことだが、こちらが期待したものと違う答えが出てきたり、全然方向の違うところに着地するプログラ

ムもありという評価の仕方も一つある。よくできましたではなくて、何でこうなるのというような評価の仕方も入っていたら面白いなと思う。

(新海委員)

プログラムの評価をするのか。例えば、行動計画の 28 ページにNPO等と記載があるが、NPO等に期待される主な取組は地域における発展的な環境学習の実施ができたかである。

小学校だけでは実施しにくいことを、NPOと一緒にやることでよりよい活動ができたかが評価軸になり、NPOと協働することにより小学生が何を学び、NPOと組んだことによって何ができたのかが評価になると思う。

提示いただいたワークシートだとプログラムの評価を目的としたものになる。このワークシートはもともと「学びを行動につなぐサポートBOOK」(以下「サポートBOOK」)を参考にして作成されたからだと思う。サポートBOOKは実践事例を掲載し、活動を参考にしていただき、活動の促進を目的としており、今作成しようとしているものは行動計画の中間評価であるため、目的が違う。各主体のプログラムの評価もあってもいいが、整理をする必要がある。その点はよく理解できない。

(千頭会長)

もちろん行動計画の評価なので、サポートBOOKはあくまで事例を分析したもの。サポートBOOKのワークシートを作ったからといって、行動計画の評価にはならない。

(新海委員)

提示されたワークシートは、実施したプログラムによって学習者にどう影響があったのかが分かる。それもあっていいが、計画の中間評価は、小学校とNPOが協働したことによって、小学校だけではできなかったことがどのようにできたか、学習者が協働した活動で何を学ぶことができたかではないか。

プログラムの中での生き物探しが、通常学校で実施しているものと何が違うのか、生き物に関する講義が学校の先生が理科で教えていることと何が違うのかなどの記載がないと、学校で実施しているプログラムと同じように見えてしまう。ヒアリングではその視点に引き寄せて、学校がNPOと一緒に活動することの意義を出せるとよいのではないか。

成果と課題の部分で、学校の教員や子供にNPOの人が来てこういう面がよかったということが書かれるとは思いますが、その点がないと行動計画の評価にはならないのではないかと思う。

(松尾委員)

環境学習のための場を整える一方で、教育の場を損なうような工事を行っている状況がある。教育の機会や場をもっと確保していくような取組を進めていっていただきたい。

この行動計画の中の五つの力は私たちが普段子供たちと関わっている中で常に意識して伝えている重要なことだとは思いますが、このワークシートを作成する目的が分かりにくい。

(千頭会長)

ワークシートとして整理をする意味では大事だが、ワークシートを作ったからといって中間評価したことにはならないということだと思う。

例えば行動計画の14ページに、「2 各主体に期待される取組と施策の展開」というのがあって、「(1) 家庭における環境学習等の推進」、19ページに、「(2) 学校における環境教育の推進」というのがあり、その下に小項目として「発達段階に応じた環境教育の実施」、20ページには、「体験学習・問題解決的な学習の充実」、それから「ESDの視点を意識した環境教育の実施」、21ページには「多様な主体との連携・協働による環境教育の実施」、そして「学校の外へと発展する環境教育の実施」というように挙げられているので、まさにこういう軸に沿って評価をしていくということになる。

そうするとESDの視点という意味では、どういう進展があったのだろうか、到達点があったのだろうか、多様な主体との連携ではどのような新しい展開が進んだのかという意味で、このワークシートが生きてくる。

だからワークシートを作るのが評価とイコールではなくて、多様な主体との連携だと、学校の外への発展という意味でこのワークシートを使うという理解をしている。

(吉川委員)

小学校においては、五つの力のうちの体感、理解、特に小さな子供であればあるほど、五感を通した学び、体験を通した学びがとても大切である。

そういう学びを学校で展開していくに当たり、子供たちはこれから地域を担っていくことになるので、地域にある豊富な人材や教材を活用して、地域の方々とともにその学びを作っていけたらと考えている。

一方で、県民として行動計画に則って、あるいはこれを具現化、意識化を図るために環境教育を実施しているという意識はおそらく学校現場にはないので、持ち帰って職員にも話をしたい。

アンテナの高い家庭においては、企業や、自治体がつけている生涯学習、社会教育としての多様な体験などに参加をし、良い体験ができていだろうが、公立の学校の子供たちは、非常に二極化していると思う。学校としての学びをいかに作るか、向こう何年間にかけてちゃんと続いていくか、そして如何に地域とともにあるかということが重要

であると思う。

こういう事業を進めていくと、その成果なりがW e bで公開されるが、学習を作るに当たって愛知県のW e b ページからアイデアを仕入れたり作っていきこうという教員はあまりいない。

今は自治体や学校の取組が点でしかないため、その点をいかにつないでいくか、コラボレーションを図っていけるかという、つなぐということを県下でできればと考えるが、学校の授業時間はコマがいっぱいなので、工夫が必要である。

ワークシートは、これだけの内容でも作成するのは負担感がある。

(中野委員 (代理))

今の教育の延長線でも十分良いとは思いますが、2030年、2050年を見据えてどうあるべきかを考えていかなければならない。世の中や地域とともに発展できるような事業を進めるにあたって、環境に関してどう協力していけるのかを協議しながら、私たち自身も変わっていけるようなものになったらいいと思う。

若い人たちが自然を学ぶ接点が少ないという話があったので、県の取組を始めとして、広く皆さんに学んでもらえるような活動になっていければいいと思う。

(守安委員)

行動計画の主体には、家庭、社会、学校とあるが、家庭というのはどこに位置付けられるのか。調査対象でいくと、P T Aや市町村は家庭に近いと思うが、ワークシートを書き込む人によって内容が変わってくるのではないかな。

小学校にヒアリング予定とあるので、協働していても学校の先生が、ある種のバイアスがかかった教育的立場で教育的目標を達成しましたというものがもしかして出てくるのかもしれない。子供においても、生徒という立場で求められている良い評価を受けやすいコメントをする可能性もある。

誰がどういう立場でこのワークシートを作るのかで評価は変わってくると思う。家庭の評価はどうしていくのか。

(事務局)

身近な環境に資する取組としてごみの分別、リサイクル、廃品回収、自然との触れ合いというようなエコアクションの実践について家庭でお話いただくなど、子供に一番近い立場での家庭というものの重要性は大きな柱になる。

県としては、エコアクション推進フェアなどでの啓発などの機会をとらえて家庭内で話してもらうように促すということが、学習の質を高める上でも重要と考える。

(千頭会長)

県の立場で個々の家庭にアプローチするのは難しいので、例えばNPOが主体となっている活動に参加した子供たちが家庭で親に伝える感想を吸い上げられたらいいと思う。

市町村は事業を通じて、直接、住民の方とやりとりをしているので、何か市町村を通じて、うまく声を吸い上げていくこともできるかもしれない。

(今井委員)

今回、ワークシートで紹介しているPTAの事例について、地域学校協働活動ということで、あいちの学び推進課で担当している活動だが、これはまさに地域と家庭と学校が一体となつていろいろな活動に取り組むということで、家庭と地域がつながるところになる。

子供たちが家庭に帰って親に伝える声が成果のところでは述べられればそれは家庭の影響があるというようにいえるのではないかな。

ただし、あくまでもこの活動の中心は左側に書いてある地域学校協働活動コーディネーターの方がいろいろ取り組んでいるので、PTAが取組をするというわけではない。PTAがやっている活動という形になってしまうと誤解が生じると思うので、書き方を工夫してほしい。

この連携協働ってところの協働の部分がもう少し出てくるといい。学校が地域や家庭、PTAに支援してもらっているという一方のことしか出てこない。

学校も地域に働きかける、子供たちが地域に出かけていろいろな環境保全活動をするなどの形になっていかないと、一方的に庭を作ってもらうなどの活動で終わってしまうと、これはあまり成果としては言えないと思う。

(千頭会長)

ここでは別紙2にあるこの行動計画に基づいた主体別に整理をしたということがあるので、まとめ方としたら主体別になるかもしれないが、主体が単独でできているわけではなく基本的にはいろいろな主体がお互いに連携協働して、環境学習は進んでいるので、そこを意識してワークシートを埋める必要がある。

調査対象候補が挙がっているが、少なくともこの団体には先行調査も含めて一度は、インタビュー事例調査に行くと思うが、これは固定でこれ以外には行かないということではないということでしょうか。

(事務局)

まず第一候補として記載の各主体にこれから調査する予定であるが、候補者の都合等により、難しい場合は、千頭会長を始めとして御相談させていただき別の候補ということ

とも考えたい。

(千頭会長)

人づくりが目的なので、活動内容の整理にとどまらないように、参加者、開催者の両面において、人づくりにどうつながったかをうまく拾っていただきたい。

(新海委員)

ステークホルダーがプログラムに参加することによって何がどう変わったのか、行動計画の五つの力にどうひもづいたかが明らかになるようなヒアリングをしていただきたい。

活動に関わった主体別に何を学んで何に気づき、このような力が育まれたのではないかということをもひも解いていくと、この行動計画の目指している評価になると思う。

中間評価なので、この五つの力にひもづけることでよいが、ゴールは持続可能な社会を支える、行動する人をつくることであり、ゴールは行動する人を私たちがどのようにつくってきたかが評価になると思う。

(千頭会長)

これからのことを考えると、多様な主体の連携で、広い意味での環境学習を行うときに、関係するステークホルダーにしてもらいたい振り返りの枠組みを県が示して、各主体として、活動が終わった時にこういう形で振り返りをしてほしいという提案ができればこれからの後半の6年間で情報が蓄積できるかもしれない。

ウ 各主体の環境学習等に関する取組状況について

(川手委員)

様々な企業あるいは他の団体の方が、子供たちにそして高校生にも、様々な体験の場を与えてくれると本当にありがたい。パンフレットを拝見すると小中学生向けのプログラムが多く、高校生向けのものは少ないようである。高校生は、小学生向けのプログラムでは満足しないと思われているかもしれないが、高校生でも知らないこともあるし、見たことは大変興味を持ち、仮に小学生向けプログラムであっても参加した高校生は高校生ならではの落とし込みをする。自分の中で整理した上で、情報発信につなげられるようなプログラムとすれば、高校生向けのものになるので、現状のプログラムも高校生にご紹介いただけるとありがたい。

(川村委員)

各委員のご意見で、行動計画は、協働がキーワードだと再認識した。

最終的に人づくりということだが、それにはいろいろな人が関わっており、これからは協働が大切となる。昨年アンケート等を見ても、協働が大切だと読み取れる。

こういった観点で、このワークシートを作り、中間評価につなげていきたいと思う。

(大鹿会長代理)

いろいろな方が今、取組をされているが、やってあげた感が強いものが多い。そうではなくて、インプットはしなくてはいけないと思うが、最終的にはそれを受けた子供であったり、一般の方が体験して、次の行動につなげようと思わないといけない。実施側の意識を変えていかないと主体的な動きにつながらないと思うので、そういう意識をしてもらえるように促すと協働であったり、探究する力が育まれていくと思う。

(千頭会長)

気付きなり、行動を促す仕組みが大事なことだと思う。

(閉会)